

節分考 神主

節分がやって来る。翌日は立春、縮こまった身体も幾らか弾みがついて梅の花でも眺めたい気分である。節分の夜は全国津々浦々のどの家でも豆をまきながら（鬼は外、福は内）を叫ぶだろう。我が神主も照れ臭く声を張り上げる。鬼とは一体何か？鬼の正体とは？・・・さて、ここで登場するのが昭和を代表する知の巨人、文芸評論家の小林秀雄だ。難解な評論を繰り広げる彼にしては珍しく平易な表現で鬼の定義付けをしている。

（陰口を利くのは楽しいものだ。人の噂が出ると話が弾むものである。みんな知らず知らずに鬼になる。よほど、批評はしたいものらしい）

このアフォリズム（箴言）には誰もが思わず頷いてしまうような真理がある。ただ、素直に認める人は少ないだろう。オレは、（ワタシは）人様の噂など致しませんよ、我が家は絆が強く何処より幸せ家族でそんなイヤな行為はありません、と申されるのがオチ、これは都合の悪いことは隠して体裁のいいことしか言わない小人たちの定番である。悪く言えば欺瞞と偽装が大手を振る所以、良く言えば本音と建前を上手に使い分ける保身の術である。が、果たしてそうだろうか、胸に手を当てて考えるがいい。誰もがあれこれと噂話に明け暮れる、噂話から陰口へと発展する。親子間、さらには近親の嫁、婿、孫を始めとして親族においてさえ横行し、隣人、職場の組織の仲間にも陰口は平然として行なわれる。ただ、陰口を利く相手は夫婦の間でとか、気が許せる集団の仲間内で、相手に絶対漏れないという条件を考えながら、だが。度し難い人間の精神構造である。だが、庶民にも高貴にも、和をもって尊しの大和の伝統的調和の心遣いがあるから陰口、悪口を知っても一族や仲間内でことを荒立てないという暗黙の良識が働く。その代わり陰湿な排除の論理が行なわれるのは請け合いであろう。

小学校で教師は（ウソを付いてはいけません、人の悪口を言ってはいけません）と生徒達に教えながら現実の社会ではこれと間逆な日常が繰り広げられている。自分の思考や価値観が合わなければ人は平気で他人への謗り、陰口を利いて憂さを晴らす。

鬼とは己の頭おのれに住んでいる斯かよう様な厄介な心理のことである。神主も人並み以上に人様の陰口、悪口を申して来た、であるからして節分の豆まきは特に念入り

に頭の邪念、この鬼を追い払う。しかし、その殊勝な心掛けも三ヶ日坊主の譬えで何のことはない、他人への小気味良い誇り、陰口の誘惑がもたげ始める始末、未来永劫に我が悪癖は直りそうもなさそうだ。毎日豆まきをするわけにもいかないし困ったものである。そう思って考えてみれば、引き籠もりと称される持て余し気味の人々こそ、他人の誇りや陰口を第三者へ利かない純な精神の人たちであろう・・・であれば、社交家には油断するなという古来からの人類の知恵を改めて再評価すべきことになる。

人様のことを云々するより我が身のことを考えろ！草葉の陰で我が両親の叱声うんぬんが聴こえて来た。トホホ！

一月末

神主